

大阪市内
5ミュージアムの
スケジュール&トピックス
4月—6月
2018

特集

驚きは、

学びびに

変わる。

大阪市立自然史博物館 第2展示室
「地球と生命の歴史」

※金額表記のない展示などは、常設展示観覧料でご覧いただけます。
※すべての施設は、中学生以下・大阪市在住の方(一部、特別展を除く)、障がい者手帳等をお持ちの方は無料です。
※団体割引などがある場合があります。詳細は各施設にお問い合わせください。

	4月	5月	6月	
大阪歴史博物館	<p>開館時間 / 9:30AM~5:00PM ※入館は閉館の30分前まで 休館日 / 火曜(祝日の場合はその翌平日) 5/1(火)は開館 常設展示観覧料 / 大人600円 高校生・大学生400円 http://www.mus-his.city.osaka.jp/</p>	<p>2/28—5/7 特集展示 新収品 お披露目展 近年市民から寄贈を受けて仲間入りした収藏品約40件を紹介します。 「ベベアン」現代 インドネシア・バリ島本館蔵(木村薫氏寄贈)</p>	<p>4/25—6/18 特別企画展 なにわ人物誌 堀田龍之助 —幕末・近代の大阪に生きた博物家— 日本の博物館黎明期に関わった市井の博物家の姿をたどります。</p>	<p>大阪市中央区大手前4丁目1-32 tel. 06-6946-5728</p> 
大阪市立自然史博物館	<p>開館時間 / 9:30AM~5:00PM (11月~2月は4:30PMまで) ※入館は閉館の30分前まで 休館日 / 月曜(祝日・休日の場合は翌平日) 4/2(月)、5/1(火)は開館 常設展示観覧料 / 大人300円 高校生・大学生200円 http://www.mus-nh.city.osaka.jp/</p>	<p>3/10—5/6 特別展 恐竜の卵 ~恐竜誕生に秘められた謎~ 巣や卵の化石、それらの親や幼体の標本を紹介しながら、近年判明した恐竜の子育てに迫ります。 大人1,300円、高校生・大学生800円</p>	<p>「湖魚奇観屏風(藤居重啓撰 湖魚図証ほか 貼込屏風)」(右隻) 19世紀 本館蔵</p>	<p>大阪市東住吉区長居公園1-23 tel. 06-6697-6221</p> 
大阪市立東洋陶磁美術館	<p>開館時間 / 9:30AM~5:00PM ※入館は閉館の30分前まで 休館日 / 月曜(祝日・休日の場合は翌平日) 5/1(火)は開館 右記の料金を常設展も含め、館内の展示すべてをご覧いただけます。 http://www.moco.or.jp/</p>	<p>4/7—7/16 特別展 フランス宮廷の磁器 セーヴル、創造の300年 マリー・アントワネットも愛した宮廷御用達の磁器製作所。その華やかな装飾にご注目。 一般1,200円、高校生・大学生700円</p>	<p>ポブリ壺「エベール」 1757年 セーヴル陶磁都市所蔵</p>	<p>大阪市北区中之島1-1-26 tel. 06-6223-0055</p> 
大阪市立美術館	<p>開館時間 / 9:30AM~5:00PM ※入館は閉館の30分前まで 休館日 / 月曜(祝日・休日の場合は翌平日) 5/1(火)は開館 コレクション展観覧料 / 一般300円 高校生・大学生200円 http://www.osaka-art-museum.jp/</p>	<p>4/17—6/10 特別展 江戸の戯画 —鳥羽絵から北斎・国芳・曉斎まで— 18世紀の大坂で流行した軽妙な筆致の戯画「鳥羽絵」。新たな笑いの世界に誘います。一般1,400円、高校生・大学生1,000円</p>	<p>5/15—6/10 コレクション展 炎をまとう尊像 —明王・天部— 密教で多く作られた炎のモチーフを持つ尊像の絵から、信仰の背景を探ります。</p>	<p>大阪市天王寺区茶臼山町1-82(天王寺公園内) tel. 06-6771-4874</p> 
大阪市立科学館	<p>開館時間 / 9:30AM~5:00PM ※展示場入場は4:30PMまで ※プラネタリウム最終投影は4:00PMから 休館日 / 月曜(祝日・休日の場合は翌平日) 5/1(火)は開館、臨時休館日あり 展示場観覧料 / 大人400円 高校生・大学生300円 ※プラネタリウムは別料金 http://www.sci-museum.jp/</p>	<p>3/1—5/27 サイエンスショー ふわふわ、きらきら! シャボン玉サイエンス 見ているだけで楽しいシャボン玉。この楽しいシャボン玉の科学をご紹介します。</p>	<p>3/1—5/27 プラネタリウム はるかなる 大マゼラン雲 南天の美しい星空と1987年大マゼラン雲にあらわれた超新星1987Aの正体に迫ります。 大人600円、高校生・大学生450円 3歳以上中学生以下300円</p>	<p>大阪市北区中之島4-2-1 tel. 06-6444-5656</p> 





モニターに映された古代の宮殿がズームアウトしていくと窓が開き、現代の眺めとリンクする。

大阪歴史博物館
10階 古代フロア
「発見! 難波宮大極殿」
奈良時代の
宮殿と人々を
リアルに再現



色や質感を比較できるように並べた本物の土器。土器は遺跡の年代を知るものさしだ。



9階への道すがら、思わず立ち止まる展望ホール。東向きだから大阪城天守閣がくっきりと!

直 径70cmもの巨大な朱塗りの柱がドン、ドンと並ぶ。美しい古代衣装や背格好もリアルに再現された人形たちがうやうやしくひかえ、何かが始まりそうな雰囲気だ。ここはいったいどこ?
大阪歴史博物館の1階エントランスから、エレベーターで一気に10階へ。この場所は奈良時代の難波宮の遺跡内でもあることから、なんとフロアの半分を使い、大極殿と呼ばれる儀礼を執り行う宮殿の内部が実物大で再現されている。学芸員の松本百合子さんによれば、設定は左大臣橘諸兄が難波宮を皇都とする勅を読み上げた日なのだそう。



よく見ると、高く奥行きがあると
思った天井は、鏡を使うことで広さが
生まれている。天皇に仕える官人や女
官たちの装束はシルク。床は当時にも
あったタイル「埴」が敷き詰められ、
思わず背筋を伸ばし、しずしず歩いて
しまう。
再現大極殿の正面にある大窓は南
東向き。何気なく見下ろし、またびつ
くり。視線の先には難波宮跡公園が広
がり、かつて大極殿が建てられていた場
所が白い基壇で示されているではない
か。館内だけに留まらない、ダイナミッ
クな遺跡の魅せ方に、大阪歴史博物館
の驚きのプロデュース力がうかがえる。

骨を見ると、クジラの口の大きさが一目瞭然! 床と壁には、生体時の復元図も描かれている。



大阪市立
自然史博物館
「クジラの骨格標本」
体長19m!
クジラの骨が
宙を泳ぐ



「ナウマンホール」では生体復元されたナウマンゾウとヤベオオツノジカがお出迎え。大きい!

も堂々り・1mある。これらはいずれも大阪湾に漂着したクジラの死体を標本化したもの。ナガスケの場合は、骨にこびりついた肉を微生物に分解してもらったために地中に埋め、7年かけて延べ300人の市民が発掘したそう。クジラと人のビッグプロジェクトの成果だと知って、さらにびつくり。

驚見れれば

ナウマンゾウ(左)とケナガマンモス(右)を先頭に、オオナマケモノやマチカネワニの骨格標本も大行進!



大阪市立
自然史博物館 第2展示室
「地球と生命の歴史」
ナウマンゾウ、
恐竜、ワニ…
実物大の全身
骨格標本

薄 暗い展示室でスポットライトを浴びる実物大の骨格標本たち。この中には太古の大阪を生きたものもある。肩高3mはあるナウマンゾウや体長7mのワニが、のしりのし歩き回っていたなんて!
実は大阪市内にもたくさん足跡が残っているナウマンゾウ。並んで展示されているケナガマンモスの顔とよく見比べてほしい。彫りの深いマンモスに比べて、ナウマンゾウは目元が丸くてやさしいナニワ顔ではないか。あれ、ゾウの特徴である鼻はどこだろう? 「顔正面の穴が鼻孔で、その穴の上側にある突起が鼻の付け根です」と学芸員の田中嘉寛さん。骨を見れば、生きものの姿や体の機能だけでなく、進化の過程までわかってくるのだと言う。
恐竜アロサウルスが「立ち上がった姿勢」で展示されているのも実は珍しい。近年の研究でより活発なイメージに変わった恐竜は、前傾姿勢での復元が主流になったのだ。同館では、ふるさと寄附金を募り、新旧スタイルの並列展示を目指している。
さて、ポーチにも出てみよう。空中を泳ぐのは、体長19mもあるナガスケジラの「ナガスケ」。ナガスケジラの骨格標本では、国内最大だ。小さい方はマッコウクジラの「マッコ」。こちら

今

から1200年前、中国・唐の時代（618〜907）には、真逆と言ってもよいほど異なる二つの美人の定義があった。一方は痩身細腰型。もう一つは豊満型。傾城の美女、楊貴妃がふくよかだったためか、盛唐以降、価値観が変わったのだという。大阪市立東洋陶磁美術館の中国陶磁室には、両タイプの美女をかたどった「俑」が展示されている。俑とは、身分の高い人の墓の副葬品。どちらも保存状態がよく、往時の色や形をよく留めている。

大阪市立東洋陶磁美術館
「加彩 宮女俑」
実は…
1200年前に作られました

宮女俑は楊貴妃以前の初唐の美女。当時流行した、髪を高く結び上げる半翻髻というヘアスタイルに施された見事な金彩は、まさか1200年も前のものとは思えない。伎楽団の一員で、手にシンバルのような楽器を持っていたのではないかと。確かに、貴人の前で演奏する宮女の誇りと緊張の表情が見て取れる気がする。
一方の婦女俑は、楊貴妃よろしくふくよか。リラックスした状態で立っている。実はこの婦女俑はゆっくりと回っている。角度によって、少女のようにも熟女のようにも見えるから不思議だ。背中のライン、耳、うなじの色気。自分好みの角度を見つけてみよう。陶磁器の魅力にハマる入口は、じつと眺めることから始まる。いずれの俑も常設展示、いつでも何度でも会いに行ける。



大阪市立東洋陶磁美術館
「加彩 婦女俑」
実は…
回ってます

かわいらしい耳が見え始めるとキュンとする。



額に花鈿を描く化粧と顔立ち、装束などに華やかな宮廷文化がしのばれる。

知って、びっくり。

仏

像や仏画といえば、あのアルカイックスマイル。顔の筋肉は動かさず、穏やかに微笑む。見るだけで自然と合掌。ありがたい気持ちになる。しかし、驚くほどに表情豊かなものもある。
まずは6世紀中頃の中国でつくられた菩薩五尊像龕。どっしり座った四角い大きな顔は、口元をゆるめてニコッと笑っている。周りに集まったお坊さんも揃ってスマイル。見ているこちらも笑顔になる。
こんな仏像を人間味があって好きだというのは、大阪市立美術館の彫刻担当学芸員である齋藤龍一さん。「当時の中国の都では真面目な仏像が流行していたものの、田舎の村では自分たちが彫りたいと思う表情でつくっていました。地方ごとに異なり、口をあけて



この裏側には何が刻まれているでしょうか？ 気になる人は、7月31日(火)から始まる彫刻展にて。

大阪市立美術館
「愛染明王像」
「石造 菩薩五尊像龕」
実は…
ラブ&ピースを叶えます

舌を出した仏像もあるんですよ。
一方で、室町時代に日本で描かれた愛染明王像は見るからに怖く、炎に包まれて近寄りたくない印象。「優しく微笑む菩薩とは違い、明王は煩惱だらけの人々を厳しく導く役割の仏さまなんです」と仏画担当学芸員の石川温子さん。人間を救いたいという熱い思いが、表情を厳しくさせてしまうのだ。改めて明王と見つめ合い、素直になれない優しさを汲み取ってもらいたい。



背負った炎を近くで見ると、金泥を使いゆらめきが表現されているとわかる。5月15日(火)より展示(情報はP8)。

大阪市立科学館
「学天則」
実は…
東洋初のロボット
(ただし復元)です



国 籍も民族も、性別すらも超越した不思議な顔立ち。1時間に1度、インスピレーションがひらめくと左手の靈感燈が光り、右手に持つ鎚矢のペンが新しいアイデアを書き記す動き。目や口元の動き、呼吸する胸など、生々しいほどリアル。入口のすぐ脇にあり、ふり返って目が合うと、ギョツとする人もいる。
名前は学天則という。「天の法則に学ぶ」と名付けられた、哲学的なロボットだ。大阪毎日新聞の学芸部顧問だった西村真琴（1883〜1956）が制作し、1928年の大札記念京都大博覧会で発表したもので、「東洋初のロボット」といわれている。圧縮空気を用いた生物らしい動きは、生物学者でもあった西村氏のこだわりの一つだった。ところが、初代学天則は各地の博覧会を巡回後、なんとドイツで行方不明になったといわれている。
現在の学天則は、2008年に大阪市立科学館の学芸員が、少ない資料を研究のうえ復元したもの。台座のレリーフには西村氏の自然科学観がみっちり埋め込まれているので、目を凝らして読み解いてほしい。

お仕事 図鑑

大阪 文化財研究所

1979年設立。難波宮跡や大坂城跡を中心に、大阪市内の遺跡・遺物の発掘調査に携わる。現在は発掘調査・保存科学・普及啓発に力を入れた16人の学芸員が在籍し、独自の文化財保存技術も世界へ発信している。

難波宮調査事務所

大阪市中央区法円坂1-6-41
電話06-6943-6803
（展示室見学希望の場合は、要事前連絡）



発掘した縄文時代の土器を持って、「昔の人々が実際に触っていたと想像すると、ワクワクします!」。

狙いどおりに発掘できると、ガッツポーズが出ます。事業企画課 事業係長 平田洋司さん

大阪市内では、今も年間100箇所ほど発掘調査が行われているのを知っていますか？ マンションなどの建設予定地に埋まっているかもしれない遺跡を壊しては大変なので、街の開発が進むほど、事前に土を掘って調査する機会が増えます。発掘調査を通じて、当時の人々の暮らしを復元することが私たちの仕事です。

出土品は、まず法律に則って「落とし物」として警察に届けます。落とし主が現れない場合、文化財として大阪市の持ち物になります。私

世界最先端の保存技術は、大阪生まれなんですよ。保存科学室 室長 伊藤幸司さん

地中から出てきた遺物は、空気に触れた瞬間から劣化が始まります。それを科学の力で防ぐのが、私たち保存科学チームの使命です。遺物の状態や材質を調べ、的確な保存処理を施します。

たとえば木製品が出土した時、内部に含まれている水分を安定する薬剤とうまく置き換え、乾燥することが重要です。出土直後から水に漬けておくのですが、そのままでは腐って劣化するため、急いで保存処理する必要があります。これまで最も普及してきた技術に

ちはそれを研究所へ持ち帰り、土をはらったり破片をつなぎ合わせたりして、正体は何かとさらに調査します。発掘前はあらかじめ何が出土するか予想を立て、的中すればガッツポーズ。予想を裏切られた場合も、それだけ知識の引き出しが増やせるということ。発掘調査ならではの面白さですね。

見つけた遺跡を一般公開して現地説明会を行う場合もあります。研究所のホームページをチェックしてみてください。難波宮調査事務所では、出土品の展示も行っています。

は、課題が残されています。そこで私が研究・実用化したのは、糖を使った保存方法。市販のお菓子にも使われている「トレハロース」です。より短時間・安価で処理でき、しかも良好な保存状態を保つことができるんです。世界的にも画期的な新技術で、タイやロシアなどから来日した研究者に伝授しています。私たちはみなさんから見えないところで展示品を守っている裏方です。でも、最新の技術が大阪で生まれ、大阪から世界に発信されていることを知ってもらえれば嬉しいですね。



リレーエッセイ MUSEUMS TRIBUTE

第1回
久坂部羊さん(作家・医師)

生命への興味と 想像が広がる 「ホネホネサミット」。

◎「ホネホネサミット」って？

2009年7月から8月にかけて開催された特別展「ホネホネたんけん隊」は、自然史博物館が所蔵する標本を中心に、たくさんの骨格標本が展示された。同時に、骨に関わるさまざまな団体や専門家の紹介や、多くの関連イベントが開かれた。「ホネホネサミット2009」もその一つで、標本づくりを行う人たちが集い、骨の魅力を共有し、広く伝える機会となった。

私の友人に筋金入りの骨フェチがいる。すでに定年退職しているが、高校の生物教師だった彼は、実習と称して生徒に動物の死骸を拾ってこさせ、理科室の大鍋で煮て何体も美しい骨格標本を作製した。モグラ、ネコ、イタチ、カラス、タヌキなどで、漂白して極細の針金で組み立てた標本は芸術品と見まがうほどの美しさだった。骨フェチは実はそれほど珍しい存在ではなく、各地に愛好家がい

て、写真集や標本作りのノウハウ本、好事家のエッセイなども出版されている。

そんな彼といっしょに観に行ったのが、大阪市立自然史博物館で開かれた第一回の「ホネホネサミット」である。当日はドイツからプロの標本士が来日して、そのテクニックをスライドで披露してくれた。標本は皇帝ペンギ



illustration: Kyoko Yamakuni

のはカバ、小さいのはリスザルと、友人はいとも簡単に言い当てた。骨格標本の魅力は、造型の妙もさることながら、やはり生命の儂さを如実に感じさせてくれることだろう。骨を眺めていると、その動物が

どんな一生を送って死んだのかと想像が広がる。人間も同じで、骨はだれにも等しく訪れる死を意識させ、取り繕うところがない。私は動物より人間の頭蓋骨のほうが好きなので、かつて骨フェチを主人公にした「愛ドクロ」という短編を書いて響感を買った。作中にはホネホネサミットをモデルにした場面も登場する。

骨フェチの友人は退職するとき、作品を自宅に持ち帰ろうとして夫人に猛反対され、私が代わりに引き取るようになった。私の仕事場にはネコとカラスの見事な全身標本が飾ってある。ときどきその骨と会話するのが、私のもつぱらの楽しみになっている。

くさかべよう 1955年大阪生まれ。大阪大学医学部卒業。麻酔科医、外科医、在外公館医務官を経て2003年「廃用身」(幻冬舎)で作家デビュー。現代医療の問題を鋭く指摘し、生死の意味を問う作風で知られる。「悪医」(朝日文庫)で第3回日本医療小説大賞を受賞。近著に「院長選挙」(幻冬舎)、「カネと共に去りぬ」(新潮社)など。

◎次号の特集テーマ「育てる」 2018年6月下旬発行予定

「OSAKA MUSEUMS」では、大阪歴史博物館、大阪市立自然史博物館、大阪市立美術館、大阪市立東洋陶磁美術館、大阪文化財研究所、大阪市立科学館を中心として、大阪市の博物館・美術館の魅力と情報を紹介しています。

主な設置場所／大阪市内の各種情報センター、交通施設、文教施設、観光事業者、ホテル、複合商業施設、区役所ほか

2018年3月20日発行 発行／公益財団法人大阪市博物館協会
〒540-0008 大阪市中央区大手前4-1-32 大阪歴史博物館内 tel. 06-6940-0550
企画・編集／株式会社140B 撮影／西岡潔 浜田智則 デザイン／ツムラグラフィック 取材／杉本恭子

ここにしかありません。

大阪市立東洋陶磁美術館の[ティールーム サロン]

美しい陶磁器を鑑賞した後に、併設の喫茶室に立ち寄り、ロイヤル・コペンハーゲンのカップでコーヒーを一杯。そんな贅沢な余韻は、ここでしか味わえない体験です。「バラゼリー」をはじめ、美術館が建つ中之島のバラがモチーフになったメニューは、バラの小径がのぞく窓際の席でいただくと、よりいっそう美味しく感じられます。4月7日(土)から始まる「セーヴル展」(P8)に合わせて、フランスをイメージしたメニューも登場します。



バラゼリー(ジュエルト付き650円)
※セットはコーヒー+紅茶付き950円

る多くの方々からの寄贈を中心とするものです。「蔵を壊す前に整理したら屏風が出てきた」大量の古文書が見つかった」など、寄贈の理由もさまざまです。新たに収蔵された品々ですから、今回の展示では「新収品」と呼んでいます。大阪市の博物館、美術館では、それぞれの館の独自性を活かした収集・展示活動に積極的に取り組んでいます。



「牡丹詰文花鳥人物図井」藪 明山作
大阪歴史博物館蔵(中篇ちせ子氏寄贈)
藪明山は、「薩摩焼」の製作と輸出を手がけた近代大阪の工芸家。その精密な絵付けが欧米を魅了した。

ミュージアム用語集
その1【収集】
大阪歴史博物館の学芸員 中野朋子さんに聞きました。
5月7日(月)まで大阪歴史博物館で開催中の特集展示「新収品お披露目展」では、近年新たに館蔵品となった資料のうち約40件を展示しています。写真の藪明山「牡丹詰文花鳥人物図井」も、こ子孫から寄贈を受けたものです。
当館では大阪の歴史や文化に関連する資料の収集を行っています。特に近年の収集は、市民をはじめとす